

第11分科会「里山と教育」

シンポジウム「江戸時代の循環社会」

日時：2006年5月14日（日）13:00～16:15

場所：千葉県立中央博物館 講堂

参加者：132名



趣旨

江戸時代の庶民の暮らしは、貧しさの中で暗黙の内に物を大切に扱う習慣がありました。その片鱗は50年前の1940年代の生活にも伺えます。また日常の必需品は里山から木や竹が供給され、燃料も化石燃料ではなく薪や炭でした。当然ですが里山の経済は潤い、活気がありました。ところが飽食の時代といわれる現代は、街にゴミが溢れ里山も荒れています。今を生きる私たちは何をなすべきか。それは次の世代に生きる人々に思いを馳せ、豊かな心を持った人材を育て、循環社会をめざすことだと考えます。

今回のテーマが「里山とゴミ」ということで、この分科会でどういったことができるかを考え、江戸時代は循環型社会だったということ、どのように人に伝えるか、数名の先生方にそれぞれの授業の展開の仕方を発表して頂きました。まず、鈴木真さんという東京都練馬区立中村西小学校の先生に、現在の小学校におけるゴミの学習を、それを受けて京都教育大学の山下宏文教授に、「江戸時代の人の暮らしとゴミ処理」について授業の展開実践例を発表していただきました。続いて森林総合研究所研究員の井上真理子さん、最後に行政から千葉県環境保全課の斎藤久芳さんをお呼びしてお話いただきました。我が国の江戸時代はきれいな街として世界でも羨望の的でありました。一方では英国の首都ロンドンやフランスの首都パリは、信じられない事ですが街にゴミが溢れ、糞尿にまみれ大変汚い街であったそうです。そして我が国の江戸時代では、修理する物はして、出来るだけ少なくなったゴミの処理を長屋単位で、行政が主導して取り組んでいました。それがどのように行われていたかを知ることで、そこにこの時代に生きた人々の心の問題、当時の公務員といえば武士ですが、町民や農民との関係など、史実を紐解きながら子どもたちに話して、現代と比較させました。

基調講演

「今求められる環境教育のあり方」 山下 宏文（京都教育大学教育学部教授）

環境とは「存在」ではなく、「関係」であり、「あるもの」ではなく、「つくるもの」。教育界では、1960年代の公害教育が、1980年代に自然保護的な色彩も強めて、環境教育となった。これからの環境教育は、自然保護・保全&廃棄物&エネルギー&食と広範囲に、環境保全のための意欲増進と文化の創造を目指す環境教育が望ましい。

パネルディスカッション コーディネーター：上善 峰男（森林文化教育研究会事務局長）

「小学校における「ごみの学習」」 鈴木 真（東京都練馬区立中村西小学校教諭）

小学校ではゴミ問題をどのように捉え、子ども達に伝えているのか。その実践状況を報告した。社会科第3学年、4学年で廃棄物の処理について学習する。またゴミの始末と再利用について追跡調査し、現場を体験させる。身近な教室のゴミ調べやゴミ分別ゲームを採り入れ意識を高めた。最後に埋め立て地の見学を行った。

「江戸時代の人々の暮らしとゴミ」 山下 宏文（京都教育大学教育学部教授）

子ども達に現在およびこれからの環境問題を正しく認識させていくため、過去における人間と環境の関係を正しくとらえさせることが重要である。小学校第6学年の社会科歴史学習で「江戸のゴミ処理」について実践を行った。ゴミ問題がすでに江戸時代から発生していたことに着目させ、ゴミ問題を歴史過程の中で認識させた。

「歴史に見る森林とのかかわり」 井上真理子（森林総合研究所多摩森林科学園研究員）

16世紀から17世紀にかけて、大規模な土木工事がおこなわれたので、木材資源枯渇の様相を呈した。各藩では森林資源管理が厳重に行われたが、江戸時代は本格的な植林のはじまりでもある。農民による森林利用も盛んで、都市が必要とする生活必需品の素材はすべて里山から供給されていた。

「谷津田・里山の保全活用：大草谷津田いきもの里」 齊藤 久芳（千葉市環境保全部環境保全推進課主幹）

多様な生物生態系が残る谷津田。千葉市を代表する、ふるさとの原風景でもある谷津田。市では、市民が自然とふれあい自然を学ぶ場として千葉市若葉区大草町および北谷津町の土地所有者の協力を得て約26ヘクタールの谷津田に「いきもの里」整備事業を展開した。当面、短期的な目標としてホタルやメダカと暮らす里づくりを。長期的には大草町の鴻巣谷津には明治までコウノトリが営巣していたと言い伝えがあるので、コウノトリと共生出来る里づくりをめざす。



【特別出演】

リコーダー合奏：ビスタークラブ有志（演奏した曲・ふるさと、エーデルワイス）
わらべうたと遊技：社会福祉法人千葉福祉会たいよう保育園の園児

内 容

江戸時代の庶民の貧しい暮らしの中で、物を大切に扱う心と廃棄物としてのゴミを処理する手法が 今日でも参考になる事に着目して、小学校で授業実践した。

会場からはパネリストへの質問、意見が相次ぎ、熱のこもったシンポジウムとなった。

結 論

ゴミの問題というのは人の心の問題である。物質的に貧しかった江戸時代の庶民の生活が、物を大切にする心を持ち、常に次の世代のことを考えた暮らし方だったことと比べると、現代の人々の生活態度は刹那的である。

特に、産業廃棄物の問題、建築設計の強度計算偽造の問題、殺人事件の多発など余りにもその場しのぎが目立つ。この姿勢を変えていかないと、ゴミの問題は解決していかないだろうという結論になりました。生活レベルの内容を下げることは難しいが、江戸時代のように小さな地域単位で取り組めば活路は見出される。ゴミは教育現場で躰教育と、人間愛教育として定着させる必要がある。

今後の課題

1. 学校教育における総合的な学習の時間を正しく認識して欲しい。
2. 刹那的に生きる人々が多い現代は、心にゆとりを持つ教育が必要。

まとめ

その場しのぎの事件が次々発覚しているが、ゴミ問題を解決するには自然の素材を見直し、循環社会の構築により未来に生きる子孫の幸せを願う気持ちが大切である。そのためには学校でパソコンを教えるよりも、自然教育によって「子どもの心」を育てる教育が緊急課題と考える。